

我が家より驛へ至る途中に長き櫻竝木の道あり。春は萬朶の花心を躍らしめ、夏は緑の木陰涼風を誘ひ、秋は紅葉碧空に映え、冬は枯枝の彼方に遙かなる街竝みを望む。我が愛する散歩道なり。過日鳥の番道沿ひの柵の上に止まりたるが、余の近づくやふはりと櫻の大枝に飛び移る。余かあと聲を掛くればかあと應ふ。余杖を引きて歩むほどに、鳥も柵を飛び移りて余に従ふ。余と鳥啼き交はしつづ行くこと數丁、通りすがりの老婦人、話にかかる事ありと聞きしにそは眞なりと驚く。

翌日ポタラカレツジの歸りに喫茶店に寄り、サンドウィッチを取り晝食を認む。残したる耳を紙に包みて、教材等を入れたる紙袋に仕舞ふ。驛より櫻竝木に差し掛かるや果たして鳥の番余を待ち受けたり。挨拶を交はしたる後サンドウィッチのパン屑を道に撒けば彼等それを啄ばむに忙しく、余を追ふことはせず。

その後行き違ひて會ふことなけれど心中密かに再會を期す。フランチエスコ、公治長の域には及ばずともせめて鳥語の數語なりとも學ぶことを得ば之望外の喜びと言ふべし。